

令和 7 年度 第 3 回 安曇野市水環境審議会 会議概要

1 審議会名	令和 7 年度 第 3 回 安曇野市水環境審議会
2 日 時	令和 7 年 1 月 14 日 午後 2 時 00 分から午後 4 時 00 分まで
3 会 場	安曇野市役所 穂高支所別棟 2 F 大会議室
4 出 席 者	遠藤委員（会長）、村上委員（副会長）、門崎委員、保尊（と）委員、山田委員、森岡委員、中屋委員、保尊（利）委員、山崎委員、望月委員、矢花委員、高橋委員、降幡委員、荒芝委員、新村委員
5 市側出席者	百瀬（環境課長）、所（課長補佐兼環境政策担当係長）、丸山（環境政策担当）、高橋（環境政策担当）、水谷（危機管理課）
6 公開・非公開の別	公開
7 傍聴人	0 人
8 会議概要作成年月日	令和 7 年 12 月 04 日
協 議 事 項 等	

次第

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 報告事項
 - (1) 2025 大阪・関西万博の出展に係る報告
- 4 協議事項
 - (1) 前回会議の振り返り
 - (2) 各部会の検討施策について（全体会）
 - (3) 施策毎の意見交換（分科会）
 - (4) 意見交換内容の共有
- 5 その他
 - (1) 安曇野の地下水に関する共著論文
- 6 閉 会

会議概要

- 3 報告事項
 - (1) 2025 大阪・関西万博の出展に係る報告

事務局：（資料 1 の説明）

- 4 協議事項
 - (1) 前回会議の振り返り

八千代エンジニアリング：（資料 2 の説明）

委 員：水利権等の法的根拠の説明だが、何条に記載があるのかではなく、用途について知りたいのが趣旨である。

八千代エンジニアリング：個別に回答する。

委 員：地下水水量の減少が、平成 23 年頃の水路のコンクリート三面張化による可能性について、継続して検討をお願いしたい。

八千代エンジニアリング：検討する。

- (2) 各部会の検討施策について（全体会）

遠藤会長：（資料 3 の説明）

(3) 施策毎の意見交換（分科会）

分科会（災害井戸）（資料4）

- 委 員：過去の地震において、一部の自治体で井戸が多数使用され、その有用性が国に伝わったことが、災害用井戸への関心が高まる背景にある。災害時、飲み水（ペットボトル）は確保できても、お手洗いや洗濯用の生活用水が不足する際に、井戸が活用される。研究者と共同で実施したアンケート調査によると、井戸が「役に立った」と回答した人は99%に達し「とても役に立った」でも77%に達した。
- 事務局：安曇野市に登録されている民間企業、市民が有する井戸は、平成25年度に井戸の登録が開始された際は約650件であったが、令和5年度には登録数が約950件となり、現状利用が確認できているのは745件である。この利用数には、工場などの大型の井戸から、ポンプについていない手汲みの井戸まで含まれる。
- 事務局：井戸の場所と位置は把握されているが、実際に利用しているか、また水質が問題ないかは別の課題である。使っていない井戸は、錆びた水が出てくる可能性があるため、利用している場所の把握が重要である。
- 委 員：多くの井戸は電動ポンプで揚水している。災害直後の停電時には発電機が必要となる。
- 委 員：能登半島地震を例に挙げると、石川県七尾市では停電は2日で解消したが、水道の普及には1ヵ月を要した。電気は比較的早く復旧した。
- 委 員：「災害井戸」の認知度として、安曇野市民の井戸の認知度を知りたい。周辺に井戸があることの認知が、上の世代から若い世代まで、どれぐらい浸透しているか。
- 委 員：近隣住民の間でも、どこの家が井戸を持っているかは分からぬことが多い。
- 委 員：地下水位が高い地域では、地震により下水道管が破断した場合、汚水が帶水層に広がることで、井戸水が汚染される懸念がある。このリスクについては、下水道管が帶水層に入っているかどうかを確認したほうがいい。
- 委 員：災害時に井戸水を生活用水として使用した場合、下水処理が追いつかず、トイレなどから水が溢れ、処理ができなくなるという課題がある。この排水処理の問題は、水道の復旧まで待つのが基本ではあるが、計画策定時に検討した方がよいのでは。
- 委 員：井戸所有者との協力にあたり、一般の井戸所有者の善意にどこまで依存し、協力を求めるかが課題となると思われる。松本市では、協力者を募集し登録してもらっている例があるが、協力者への見返りがないと聞いたことがある。
- 委 員：協力してもらうためには、普段から年に1回程度の水質検査費用を市が一部負担するなどの方策も検討すべきである。協力が得られた井戸については、事前に場所の公開の了解を得た上で、町内会など地域コミュニティ内で情報を共有することが現実的である。
- 委 員：現状、多くの自治体の災害計画では「井戸を使う」という記述が非常に少ないと、何も書かれていらない状況である。そもそも防災計画の担当は市のどの部署になるのか。
- 事務局：地域防災計画は危機管理課の所管。災害発生時の指示出しや段取りも危機管理課が中心に担うため、井戸情報の収集は環境課が行うとしても、防災計画の中でも役割分担などの記載があることが望ましい。
- 委 員：今後の計画への組み込み方として、防災計画だけでなく、水環境基本計画の6つの柱の1つである、「水を上手に使う」の項目として、災害井戸を位置づけることも考えられるのではないか。

分科会（涵養施策）（資料5）

- 委 員：松本盆地の地下水の起源は8割が河川水であると考えている。河川涵養は重要である。福井県大野市において、河川を用いた涵養施策を行っている。
- 事務局：九頭竜ダムからのフラッシュ放流の件と推察する。
- 委 員：穂高のわさび田において近傍の河川に帶工が設置されたことにより水位が低下しない。河川からの地下水涵養がなされていると考える。

事務局：大王わさび農場において、河川に対策をしたところ復水したと聞いたが、何かご存じか。

委 員：河川に袋詰め玉石を入れたところ、目に見えて復水したと聞いている。なお、一部においては湧出量が多すぎることにより、わさび田からの排水が課題となっている。

委 員：わさび田の湧水は、冬に枯れなくなったが夏は多すぎる。夏水は不要である。

事務局：拾ヶ堰の水利権や実情について伺いたい。

委 員：冬期も2t/sの水利権を有している。ただ、現在は、水路の点検のため、通水していない（奈良井川の頭首工にある取水口を閉めてある）。なお、水路整備（コンクリートによる三面張）から30年が経過し施設の老朽化がみられるものの、これに起因する漏水は微量と考えている。

事務局：いわゆる「落ち水」はどのように管理しているのか。

委 員：職員2名が朝夕2回現地を確認している。雨などが降り堰の流量が増えると、堰板の高さを調整し流量を調整している（烏川への排水量を増やしている）。

事務局：この落ち水の水利権はどのように考えるのか。

委 員：個人的には、冬期の涵養水としての活用は可能と考えている。

事務局：落ち水管理に手間が掛かっていることが分かった。様々な関係者がプラスとなるような涵養施策を進めることができが、これには様々な機関への意見聴取・課題調整（解決）が必要と考えている。

分科会（普及啓発）（資料6）

事務局：これまでの普及啓発だが、高校の授業の一環としての実施や、ゴミ拾いしながらカヌー（清掃ボランティア）などをしてきた。今後、工業会への出前講座、サンリンI&Fと協業したかき氷などを実施したいと考えている。課題としては「加入拡大とマッチング」が挙げられる。大企業は株主の兼ね合いで保全活動が必要だが、中小企業には保全活動にそこまでのメリットがない。また、認知度向上について、SNSを今後誰がやっていくのか、人数も縮小となる中、どこまで手が回るかも課題として挙げられる。

事務局：まずは各委員からの自由意見を募り、今後の普及啓発の方針検討に活用したい。

委 員：水結のロゴだが会社と似ている。響きも活動もいいがインパクトが弱い。目標や目的が明確ではない気がする。活動は継続していくべきいいのではないか。大町の商店街でかき氷を季節限定でやっていたので参考になる。揚水量は事業者が1/3を占めるというはどういうことか。万博の紹介動画は良かった。今後の活動で使っていけばよいと思う。

事務局：安曇野市の揚水主体は、事業者が1/3、水道事業者が1/3、養鱒業者が1/3となっている。

委 員：誰に何を普及させるのかが明確ではない。安曇野市内なのか市外なのか。長所を伸ばす活動もあるのでは。

委 員：目的を明確にする。企業にできることが異なる。通常の業務と並行してできることもあるが。登録する部門を分ける。チェックリストとは別。

委 員：高校生が入っているのはいいと思う。高校生が動けば小中学校に普及できる。高校生と大学生と一緒に取り組めばどうか。高校生や大学生に情報発信をやってもらう。学校を組み合わせるとパワーを発揮すると思う。

事務局：探求授業の必須化に伴い高校生が協力してくれるようになったと考えられる。

委 員：資料6について、申請書の中で水に関し「何をやりたいか」を書かせるのがよいのでは。

事務局：名水コーヒー等を作ってくれた。商業高校なのでプロモーションの機会も重要である。

委 員：部門分けについて、部門ごとにこういう活動があるという紹介ができれば、何をしたら良いか分からぬという若者も参加しやすくなるのでは。若者のインスタグラムの利用頻度は高いので、ストーリーズや位置情報のリンク付け。ハッシュタグ（#水結）をつけるとよさそう。

事務局：企業は、自分たちの名前が埋もれてしまう。自分たちの会社の名前が前に出るといいのか。自分たちはできないけど、例えば清掃関連に資金を提供していただく。イベントの協賛として名前を出すとかスポンサーを出す等。

委 員：メリット・デメリットの前に、水結の活動に資金提供する理由（有名になる等）が乏しい。行動してくれる人を増やすのか、認知度を上げるのか、普及の目的が明確でない。

事務局：両方が望ましい。より好循環が得られると考えている。

委員：水との距離が遠い。川が危ないから近づくなと言われてきた。そこを近づけたい。一般市民は地下水が多少減っても気にならない。

委員：水環境といつても地下水、わさび。まずは地下水の町だという認識を市民に植え付ける必要がある。そもそも市民にどれだけ意識があるのか不明。「わさびのためにやらないといけないのか」と言われる。「水道水がなくなる」と言われたら協力するが、わさびだと微妙ではないか。もっと広い範囲を味方にする必要がある。ターゲットをどこに絞るか。地下水は共有の財産という言葉をどれだけ自分事と考えられるのか。

委員：農業高校出身で、講座を開いたりしていたので、そういうイベントを開くのはよい。地域課題を研究する授業があるので、その授業で関わっていくのも良いのでは。先ほどの動画も市役所の1階で流すのもよいと思う。企業は最後に協賛として載せる等。小学校の遠足のように水結ツアーはいかがか。親にも広がる気がする。

委員：予算はどの程度PRに使えるのか。

事務局：万博は特殊であった。補正予算で賄った。

委員：予算に応じてやり方は変わる。商品にシールを貼ることでブランディングできるのではないか。多少お金がかかるかもしれないが、シールにQRコード等があると良いと思う。

事務局：保全活動しているお墨付きになるか分からぬが、可能性はあると考える。

事務局：自由意見をまとめたいと思う。以下、5点をまとめとする。

- ・水結の活動について「目的や目標を明確にする」
- ・これまでの「活動を継続」していくことは重要
- ・PRにおける「学生の力」は大きい。高校生→大学→小中学校とつないでいく
- ・まだ住民に「安曇野が地下水の町」であるという認識が強くないので強くする
- ・動画はかなりよい。市役所やほかの場所でも流して「動画を活用」する

(4) 意見交換内容の共有

分科会（災害井戸）

遠藤会長：①災害井戸の必要性、②水環境基本計画への組み込み方法、③今後の取り組みの3点の議題が上がった。

遠藤会長：①は、災害井戸の必要性があるという意見で一致した。②は、「水環境基本計画」に取り入れる場合、現在の6本の柱の1つである「水を上手に使う」という柱に位置づけるのが良い。また、災害対応は危機管理課の担当であり、「防災計画」に入れるべきか、「水環境基本計画」に入れるべきか、あるいは両計画で内容を調整すべきかといった細かな振り分けや役割分担が今後の課題である。③は、今後整備を進めていくための最初のステップとして、「利用可能な井戸の把握」「協力いただけるかどうかの意向調査」が必要であるとの意見が出た。

委員：停電時にポンプが使えなくなる可能性についてどのように考えるか。

遠藤会長：能登半島地震を例に挙げると、石川県七尾市では停電は2日で解消したが、水道の復旧には1ヶ月を要した。電気は比較的早く復旧するため、長期的な断水を見越した生活用水の水源として災害井戸は有力であると考える。

事務局：井戸を整理する際、自噴井戸の所在についても合わせて整理することが良いと考える。

事務局：安曇野市では事業用の井戸から家庭用の井戸まで約950件の登録があり、うち200件が「現状利用していない」、「井戸を廃止した」との報告を受けている。井戸の規模、深さ、構造も様々で、災害時に実際に使える量や水質であるかは個別に判断が必要である。

分科会（涵養施策）

八千代エンジニアリング：これまで検討・実施してきた涵養施策を紹介するとともに、水、人、資金、施設の観点から涵養施策の課題について共有した。その中で、地形の等高線とほぼ平行に分布する拾ヶ堰（農業水路）に、山側から流入し、拾ヶ堰を経由し烏川へ流下

していく「落ち水」を利用することが施策の可能性として挙げられた。

八千代エンジニアリング：非かんがい期は、取水口である奈良井川の水門を閉じ、施設の老朽化が進んだ箇所の点検・補修している。堀金より下流は落ち水が流入することにより、水路に水が貯まり点検・補修ができないことと溜まったごみの処理が課題となっている。落ち水は非かんがい期にも一定流量があることから、現在課題となっている非かんがい期の涵養施策としての「落ち水」の活用について今後検討を進めていきたい。

委員：烏川沿いにあるアルプス公園の人工池で、ここ1~2年で季節を問わず水位が上がり、水が溢れてしまう事象が発生しているが、これまでの涵養施策との関連性はあるか。

八千代エンジニアリング：これまで安曇野市で実施した涵養施策は、アルプス公園よりも下流側で実施しており、公園まで影響が及ぶとは考えにくい。気象の変化によって生じた現象かもしれないが、詳細は不明である。

委員：奈良井川の水門の開閉時期を教えていただきたい。

委員：3月20日に水門を開け、9月末まで取水を行う（かんがい期）。10月以降は取水を行わない。

分科会（普及啓発）

安曇野市：①水結の現状、②ターゲットの設定、③自分事化への課題、④持続可能な運営、⑤参加者の貢献の見える化、⑦企業参画の促進が、議題に上がった。

安曇野市：①では、水結の活動状況（勉強会の進捗、予算申請中の企画など）を共有し、かき氷の企画や学生活動などの取り組みなどが紹介された。

安曇野市：②では、活動の「目標、目的、ターゲット」がぼやけている現状にある。事業者、個人、農家など、ターゲットごとに活動参加のメリットが異なるため、これを明確に整理した上で展開することが望ましいとの意見が出た。

安曇野市：③では、地下水の減少傾向といった現象が自分事化されず、実生活への具体的な悪影響が伝わっていない状況にある。そこで、水資源の減少が実生活にどんな不利益をもたらすかを、端的に伝えられるような活動・工夫が必要であるとの意見が出た。

安曇野市：④では、職員だけでSNS更新などの取り組みを行うのは、持続可能性に欠けるため、参加者が得意なことを生かした貢献ができるような、持続可能な体制づくりを目指すべきとの意見が出た。

安曇野市：⑤では、水結の登録要件について、登録者が「何をやりたいか」「何ができるか」を把握し、貢献したい人と活動をマッチングできるような、ネットワークづくりが理想であるとの意見が出た。

安曇野市：⑥では、「民間企業の参画が課題であるため、「水結シール」を導入し、保全に取り組む企業や農家にQRコード付きシールを提供し、ブランド作りに役立ててもらう。」「作成した広報媒体に企業名を入れることで、企業が貢献しているメリットを前面に出し、埋もれがちな企業の貢献を見る化し、インセンティブとする」などの意見が出た。

5 その他

（1）安曇野の地下水に関する共著論文

事務局：（資料7の説明）

（全体意見）

事務局：令和7年度第4回安曇野市水環境審議会は、令和9年1月14日（水）としたい。

6 閉会

以上